

# 直近の米の需要と価格動向

6月19日に県境を跨ぐ移動自粛宣言が解除された。外出自粛は感染予防の最大の防御となり新規感染者数は減少し、20日以降は経済復活への歩みへと軸足を置いた新たな新型コロナウイルスと向き合う生活スタイルが始まった。しかし7月に入り首都圏を中心に第二波の予兆を思わせる感染者の増加は気になるところだ。首都圏の通勤電車のラッシュアワーは時差出勤や在宅勤務を継続実施している企業も多くあるため以前の様な喧騒とはなっていないものの、6月末時点での混雑具合は前年同月で約マイナス20%近くまで利用数も回復しているという。

さて、農業業界においても新型コロナウイルスの影響が具体的な数字で示され始めたので紹介したい。肌感覚で「多分そうだろうな」とは感じてはいたものの「やっぱりか」と言わざるを得ない。それは直近の米の需給と価格動向についてだ。米集荷業を営む肥料商から外出自粛中に漏れ聞こえてきた話と大体一致する。「米が動かないので肥料が倉庫に入らない」という。えっ？今の時期に米が動かないなんて信じられないと思われた方もおられるだろう。2月末以降、報道ではスーパー等で精米が飛ぶように売れ陳列棚が空っぽになっている映像が流れた。トイレトペーパーでも同じような現象が起こったが、農水省は国民に対していち早く、米については民間流通在庫や国が保有する備蓄米も含めて備えはあるので一時的な米の買い占めは控えるように、と注意を呼び掛けた。「令和のコロナ米騒動」とも呼べるような事象が発生し米の流通においては家庭内備蓄による特需により前倒し需要が発生したと感じていた。農水省が発表したマンスリーレポート6月号によると米穀販売事業者における販売数量に関しては図の通りコロナ騒動が発生した2月以降前年比1割以上販売数量が伸長している。しかしながら、業務向けの販売数量は新米が流通し始めた令和元年9月から低調で前年比割れが続いており、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言が発出されて以降の外出自粛や飲食店等での営業自粛要請の影響により3月は前年比89%、4月は75%と落ち込む結果となった。家庭用の消費は増えていても近年伸びていた業務用利用に打撃が走ったことから全体量として米がはげないという影響が出始めた。米卸によると家庭用米消費が右肩下がりの中で業務用の活路に注力した消費促進の活動を行っているところが大多数であったため、このブレーキは早くも令和2年産の購買活動に影響が出てくると気を揉んでいる。米卸の各仕入部隊は業務用の主要銘柄については各産地と紐付けされた購買活動を行っており消費が鈍ると産地預かりの米も滞留し動かないわけである。

また、米卸は通年の使用量を予測して新米に切り替わる時期の古米の在庫量を想定し新米が出始める前に価格相場を睨みながら産地側と買い付け価格の交渉を行う。この新型コロナウイルスの影響は想定外の騒動であったため、一部の米卸から令和2年末まで令和元年産は捌ききれないのではという声が聞こえてきた。誠に頭が痛い話だ。実際に4月末時点の米の民間在庫量の推移を見ても205万玄米トンと13万トン在庫量が拡大している。消費が鈍ると売り急ぐ動きが出て来るので価格も米の相場も下落していくのは当然だ。米の相対取引価格では平成30年産米は1俵15,688円、令和元年産米は1俵15,749円（ただし、平成30年産米は新米出回りから元年10月まで、令和元年産は出回りから2

(次ページへ続く)

## 【米穀販売事業者における販売数量の動向（前年同月比）】

農水省「米の取引に関する報告」

	令和元年							2年			
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
小売事業者向け	94%	99%	96%	101%	97%	99%	99%	101%	110%	124%	110%
中食・外食事業者等向け	104%	110%	100%	97%	98%	95%	97%	98%	99%	89%	75%
販売数量合計	99%	99%	98%	99%	97%	97%	98%	100%	105%	108%	94%

年4月までの比較)と61円高と微増であったものの、米穀機構による調査では米の取引関係者の判断として国産米主食用の向こう3ヶ月の米価水準は下落傾向で、また米の先物取引価格は銘柄にもよるが1俵50円~200円台の下落傾向で推移している。

主要農産物の動きとして小麦粉は最近僅かながらも棚に置かれるようになったが、休校要請や外出自粛要請以降は4月中旬まで前年比170%台と右肩上がり推移(ただし、5月1週目以降は130%台まで低下)して米とは違った動きになっている。また、在宅が増えている中で家庭内でのアルコール消費量は増えているようだが業務用での消費が急減したため大手ビールメーカーは軒並み苦戦している。フレコンメーカーの話では、実際にビール工場に大麦の搬入するために使用されているフレコンバックの需要が落ちている、とため息が聞こえている。経済活動を回復させつつコロナの第二波も受けとめるという簡単な道のりではないが、今年の作況と初物の価格動向が早くも気になるところだ。

---

## 農産物の安定供給に感謝

新型コロナウイルスは各方面で様々な悪影響を及ぼしている。気がつけば「WITH コロナ」や「コロナ禍」といったワードが定着し、マスク着用や手指消毒の慣行はもちろんの事これから益々暑くなる時期を迎え熱中症対策も注意が必要となり、新しい生活様式を実践する日々が続いている。厚生労働省のホームページには新しい生活様式に関する実践例の記載があり、既に実践されている部分が大半だと思うが、再確認という意味で一度はご覧になられては如何だろうか。

さて、以前に比べれば容易にマスクや除菌関連商品を手に入れる事が出来るようになったが、一部の商品においては引続き入荷数に限りがあるなど購入する事が難しいものもある。コロナ禍で在宅時間が増え、家で料理をする回数は間違いなく増えており、生鮮食料品については、スーパー等で購入する際にそこまで品薄感を感じる事はなかったように思うが、皆さんはどのように感じておられるだろうか。コロナ禍でも農業の生産現場は止まる事も無く、栽培された様々な農作物が流通を経て消費地に届いている。県を跨ぐ移動に制限が発出されていた時期も、農産物に限った訳ではないが、物流が大きく滞る事がなかったからこそ色々な商品を購入する事ができたのも事実であろう。

そこで、新型コロナウイルスの発生に伴い我々の食生活や農業に対する意識はどのような変化が起きたのかを考えてみた。感染防止のためにも免疫力向上を意識し、日頃よりも野菜を多く摂るなど栄養バランスには気を付けるようになった方は多く、国内農業への関心(意識)が以前と比べ高まっているのではないだろうか。

外出自粛をする中でこれを機に自給自足の観点から家庭菜園を始めてみた方、子どもへ勉強の為に種子や苗・栽培キット・書籍といった関連商品を購入し栽培をスタートしたという方、外出を控えるために様々な持ち帰り・宅配形式を利用した方もいると思う。消費者のみに限らず生産者側も直接消費者へ販売できるメリットから、食べチョコやメルカリ、ポケットマルシェといったアプリの利用が増加している。果物や魚介・肉類といった商品だけでなく普段は見かけない珍しい野菜も出品されていたり、生産者から直接購入できるという事以外にも気になる点があれば生産者へ質問できるという直接のつながりを持つ良さがうけているようだ。更に生産者と直接やりとりができる為、購入者からの『美味しかったです』や『ごちそうさまでした』の感謝の気持ちを直接受ける事で生産者も励みになっているという。この様なアプリや通販がフードロスに少しでも貢献できることを期待したい。

まだまだ予断を許さないコロナ禍。生活様式はこれからもその都度変化し人は適応していくのであろうが未曾有の危機の中でもなぜだかお腹は減るもの。食生活を支えて下さっている生産者の方々への感謝の気持ちを忘れず、『いただきます』『ごちそうさまでした』という言葉の意味を噛みしめながら、味わいたいものだ。(福岡支店)

---

東京で新型コロナウイルス感染者数がまた増加傾向にあります。私達に出来る事は感染しない・させない様に周りに思いやりを持って行動することではないかと思えます。 編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>